
2010年 TOKYO FM コミュニケーションズ・グループ年賀式 ～2010年1月5日(火)午前10時30分 TOKYO FMホール～

<代表取締役社長 富木田 道臣 挨拶>(要約)

開局 40 周年の年がやって参りました。そして、21 世紀を迎えて丁度 10 年目にあたります。この 10 年、世界的規模で様々な社会革命が進行し、中でも IT 革命以降、メディアの多様化に伴い広告情報流通のパラダイムが大きく変わりました。マスメディアが情報を寡占してきた時代から、今や個人が世界に情報を発信するまでになり、生活者は余りあるメディアを自由に選択でき、広告コミュニケーションの主体が逆転しようとしているのです。生活者はメディアに対して厳しい選択の目を持つようになり、メディアのコンテンツの質がますます問われるようになっております。いわば、“メディア淘汰の時代”がやってきたのであります。

このサバイバルに最も重要となるのがリスナーの選択対象となりうる共感性の高い、即ち質の高いコンテンツ創りと、メディアのプレゼンスを明確化させるためのステーション・アイデンティティをはっきりと打ち出すことであります。昨年は、『アースコンシャス～地球を愛し、感じるころ』、『ヒューマンコンシャス～命を愛し、つながるころ』という当社の 2 つのステーション・キャンペーンの哲学を象徴するコミュニケーション・キャッチ、『エイティ・ポイント・ラブ』の告知に努めて参りました。今年やって頂きたいことは、この哲学「ポイント・ラブ」を当社の番組制作をはじめとする全ての活動の指針とすることです。ポイント・ラブのカテゴリーで様々なアクションの実践を、全社一貫して徹底的に推進して頂きたいのであります。生活者は様々な社会不安の中で、心の拠り所を求め合う状況にあります。こういうときこそメディア自身が自らのアイデンティティを明確化し、共感して頂くことにより響き合うリレーションシップを構築し、当社のイメージを確立したいのです。今、私達が目指すものは、企業理念の原点に再び戻り、感動と共感のネットワークを創ることです。

音声コミュニケーションは人の心に深く入り込み、他のメディアには無い、独特の共感性を創り出す事が出来ます。この共感性を核とし、次々と広がるコミュニティ形成力が FM メディア最大の強みであり、プレゼンスを向上させていくものであります。これが、ひいては広告主の皆様のブランディングにも必ず貢献できる道だと考えています。一方で、国家的課題をテーマとする哲学を持った番組開発が必要なきときであります。国家的課題に『ポイント・ラブ』の切り口でどうアプローチするか、まずは「食の自給率の向上並びに安全・安心」、「イマジネーション豊かな子供の育成」等山積する国家的課題にスケール感のある展開を期待しています。

更に、いまラジオ全体の置かれた状況を見ると、そもそも、我々は、「時系列的なリスナー創造」を怠ってきたのではないかと反省があります。今やラジオの聴き方すら知らない若者が増えています。この掘り起こしは長期的かつ喫緊の経営課題であります。当社ではこの点に危機感を持ち、2005 年 10 月に「SCHOOL OF LOCK !」を投入し、大なる成果をあげてきました。今や、FM、AM 問わず 101 社全社で学校訪問キャンペーンを実施し成果をあげております。次はプリスクールの子供たちへ対象を拡げ、幼児の頃から、親子でラジオに接触する体験を促すことが必要であると考えます。幼児体験は一生の行動に大きな影響を及ぼします。

嬉しいことにauからFMケータイがこの冬から再び発売されましたが、春には3～4機種、夏には殆どの機種に搭載されると聞いています。そして、i-pod にもFMが搭載され、iPhone ではサイマル放送が聴けるアプリの投入を行い話題となるなど、新しい端末対策が進んでいます。調査データによると家庭には平均 2.6 台の聴取端末が存在しているわけですから、これを眠りから起こさなければなりません。今一度原点に戻って FM、AM を問わず、ラジオの聴取経験の底上げをしていかなければなりません。

そして、次の新たなチャレンジがマルチメディア放送です。様々な業種の皆様をお迎えし、新たなビジネスモデルによる、新しいメディアの創造に取り組んでいきたいと考えています。

我々を取り巻く経営環境は引続き厳しいものがありますが、今後は音声から映像まで、制作能力強化をテーマとしたグループ再編が最大の課題となります。そして次世代へ向けたメディア創りに戦略的に取り組んでいこうではありませんか。社員一人一人が、40 周年を期に、何を変えることが出来るか、どうポイント・ラブ・アクションを起こしていくか、大いに遊び心を持ちながら、若い社員の夢が叶うよう着々と歩みを進め、誇れることを次々と実現していく。そんな会社でありたいと強く願っています。